

東京都健康長寿医療センター
養育院・渋沢記念コーナー
連絡先: 老年学情報センター

葵の石灯籠

小公園内に、2基の大きな石灯籠が据えられています。三つ葉葵の紋が彫り込んであり、徳川家ゆかりの石灯籠です。渋沢銅像の近く、スタジイの大木の下にある方をよく見ると、下のようには彫られています。

奉献 石灯籠 一基
東叡山
文恭院殿 尊前
天保十一年庚子年閏正月晦日
豊後国佐伯
従五位下 伊勢守藤原毛利高泰



東叡山は上野の寛永寺のこと。文恭院殿は第11代将軍徳川家斉の戒名。天保十一年庚子年閏正月晦日。豊後国佐伯は、大分県。従五位下 伊勢守藤原毛利高泰

徳川家斉は天保12年(1841年)正月30日に死去しています。大分県の小大名が、第11代徳川将軍家斉が亡くなったときに、寛永寺の墓前に奉納したものとわかります。



もう1基、銅像から遠い方にあるのには右のように彫られています。

大猷院殿は、将軍家光のことです。

奉献 石灯籠
武州 東叡山
大猷院殿 尊前
慶安五年四月二十日
松平出雲守源勝隆

慶安五年四月二十日：一回忌の命日

松平出雲守源勝隆：天正17年(1589年)、徳川家康の重臣・松平重勝の5男として生まれ、寛永15年(1638年)、上総国佐貫藩主となって、1万5000石を領しています。一回忌の時、寛永寺の墓前に奉納したということです。

家光は、徳川三代将軍(慶長9年～慶安4年4月20日：1604～1601)享年48歳。

遺骸は遺言により東叡山寛永寺に仮埋葬され、翌承応元年（1653年）には、日光の輪王寺に改装され大猷院廟が造営されています。

二つの徳川家の、寛永寺の灯籠は、様式は似ていますが年代が200年近くも離れているのです。

寛永寺にあった石灯籠が、どうしてここ板橋にあるのでしょうか……



徳川将軍は、初代家康と三代家光は日光に霊廟がある他は、上野の寛永寺と芝の増上寺を菩提寺とし、ほぼどちらかに葬られています。寛永寺には、四代家綱、五代綱吉、八代吉宗、十代家治、十一代家斉、十三代家定のお墓があります。芝の増上寺には、二代秀忠、六代家宣、七代家嗣、九代家重、十二代家慶、十四代家茂のお墓があります。十五代慶喜だけは、明治になって隣接する谷中墓地に神式で葬られています。

江戸時代、将軍が亡くなるとどちらかのお寺に霊廟が作られ、全国の諸侯が、墓前に燈籠を献上したようです。諸侯の江戸屋敷が、江戸の石屋に石灯籠を発注するので、江戸の石屋は大忙し。それはともかく、戦前の両寺には、数千基の石灯籠が林立していたそうです。

戦後増上寺は、敷地のかなりの部分をプリンスホテルに売却し、そこにあった燈籠は……寛永寺も、墓地の再開発で、行き場を失った燈籠の多くは、信州の鬼押し出しの寛永寺別院にあります。西武の堤康次郎の寄進で建てられたお寺です。その他の多くの灯籠が関東のあちこちに配られています。養育院長・渋沢栄一は旧幕臣、寛永寺関係者との交流は深く、一族の墓地も谷中にあり、明治の終わりには、寛永寺の檀徒総代を務めています。このことと板橋の寛永寺の燈籠の関係は歴史の闇の中……

今回の工事の前、椎の木の下にあったのは家光の燈籠で、恵風寮の前、新病院の建っているところに家斉の燈籠があったのです。今回それが入れ替わってしまいました。椎の木の下、養育院本院碑の後ろにあるのが、家斉墓前の燈籠です。

ところで、老中・松平定信は、11代将軍家斉が将軍になったときの初めの筆頭老中で、七分積金が制度化されたのは、家斉の治世と云うことになります。また、旗本・大久保忠寛が、初めて小納戸として江戸城に出仕したのが、家斉晩年のことであり、何かの時に、弓が上手と褒められたと書いてあります。彼はのちに、アメリカの黒船が来た時に、幕府の海防掛に抜擢され、蜜書調所総裁の時、西洋版小石川養生所の建設を提案し、明治になってそれを実現したのが養育院です。養育院にゆかりの2人が仕えた家斉将軍の、墓前に捧げる石灯籠が、ここにある不思議を感じます。工事関係者が意図したともおもえないのですが……(稲松)